

編集後記

日本では、最近、Crohn 病が増加傾向にあるようである。Crohn 病は一般的に、その典型的とされている病理形態を呈するようになってはじめて診断される場合が多く、そのときは既に2～8年を経過した慢性状態である。それは、Crohn 病の発病初期あるいは急性期の臨床像が非特異的あるいは不明確であるからである。

本号の特集“Crohn 病の診断”の目的は、Crohn 病の早期診断をいかにするか、という非常に難しい問題を正面から取り上げたものである。座談会の所にみられる多くの表は多数の施設の協力によるものであって、それから Crohn 病の臨床像の一般的な傾向を知ることができ、それは貴重な資料である。

主題では Crohn 病の臨床像と病理形態像との対応という問題について論じられている。その問題を明らかにすることは、Crohn 病の早期診断を可能ならしめるためにどうしても通過せねばならぬことである。症例・研究の所は、臨床的ならびに病理学的に典型的でない Crohn 病の病変についてである。

本号では、Crohn 病という臨床・病理像の幅がある程度浮き彫りにされた。以上の資料、研究、症例などからは、Crohn 病の早期診断のための研究の手掛かりが得られるように思える。

<中村 恭一>